

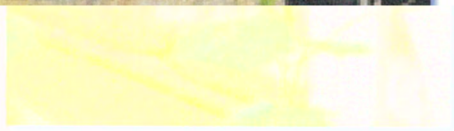
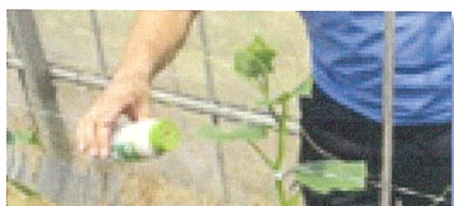
平成26年度 普及活動成果集



農村女性リーダー研修会



ちくしW2号（ラー麦）の収穫



高品質果樹生産「高畝マルチ栽培」



高糖分飼料用「あちまぎか」の収穫

福岡県福岡普及指導センター

平成27年3月

はじめに

福岡地域は、大都市圏に位置し消費者と隣接した環境下で生産活動が行われています。当地域の農業振興においては、消費者の直接的な要望に応えるとともに一層のコスト低減を進め、魅力ある農業経営を実現し元気な産地を育成する必要があります。また、新規就農者や女性農業者など元気な担い手を育成することも重要です。このため、雇用を活かした収益性の高い農業経営の推進、安全・安心農産物やブランド品目の生産拡大、永続性のある担い手への農作業の集約化などが課題となっています。更には、直売や都市・農村交流活動などを通じて、消費者と生産者の相互理解や地産地消を進めることも大切な課題です。

県では、平成24年3月に福岡県農業・農村振興基本計画を策定し、その達成に向けて各種の施策を展開しています。福岡普及指導センターでは、この基本計画に則して毎年普及指導計画を定め、福岡市農業指導センター、糸島農業計画会議、筑紫地区営農推進協議会など3地域の営農推進組織の市町、農業委員会、JAをはじめ、指導農業士、青年農業士、女性農村アドバイザーと連携しながら普及活動を展開しています。また、新規就農者の確保・育成については、市町、JA、農業大学校との連携を強化して取り組んでいます。なお、昨年12月には農林水産を網羅した福岡県農林水産業・農山漁村振興条例を制定しており、今後各種施策を展開していくこととなっています。

平成26年度の普及活動については、「元気な産地・担い手」「雇用を活かして収益性の高い経営」「若者、女性が活躍する都市型農業」をスローガンに掲げ、3つのプロジェクト課題と15の係別課題に取り組んできました。また、本年度は、夏季の長雨・寡日照に加え、台風の相次ぐ接近に対応し、随時技術対策資料を作成し、栽培管理の徹底等と呼び掛けてきました。

この成果集は、こうした普及指導センターの活動を農家の皆さんや関係機関の皆

目 次

	ページ
1 普及活動の成果	
(1) 女性の視点や発想を活かした農業経営に向けて	1
(2) 次代を担う農業者の育成	2
(3) 県育成品種「元気つくし」の普及拡大	3
(4) 県育成品種「ちくしW2号(ラー麦)」の普及拡大	4
(5) 施設キュウリ栽培における 天敵「スワルスキーカブリダニ」の普及拡大	5
(6) 新たな技術導入による「れき耕栽培トマト」の収量向上	6
(7) 「糸島産クルクマ」のブランド確立!	7
(8) 高品質化でホオズキの1戸当たり売上を更新	8
(9) カンキツ経営の収益性向上	9
(10) 高糖分極短穂型飼料稲「たちすずか」の普及	10
2 トピックス・各種表彰の紹介	11~16
3 資料一覧	
(1) 現地活動情報一覧	17
(2) 平成26年の気象概況	18
(3) 平成26年度の主な展示ほの概要	19-20
(4) 普及指導センターの活動体制	21

女性の視点や発想を活かした農業経営に向けて

～ 段階に応じた女性農業者の経営参画支援

ビジョンを作成した。

研修を契機に、ビジョンの実現に向かって受講生の経営参画への意欲が向上し、面積拡大や雇用を導入するなどの成果が得られた。(写真1)

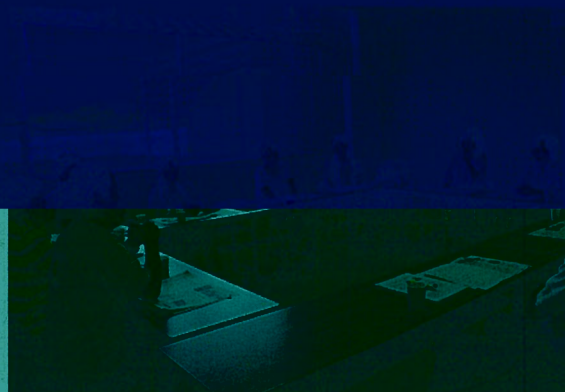


写真1 先輩農業者との意見交換

(2) マーケティングの経営視点を習得

加工や農家レストランに取り組んでいる経営発展に意欲的な5名の農業者に対して、県域での研修を実施した。受講生は、ワークショップや異業種とのワールドカフェ（意見交換）により、新たな経営や販売に対する考え方を学ぶとともに、マーケティングを意識した経営視点や加工、情報発信方法などを習得した。

(3) 販路拡大に向けた研修



受ける加工グループ

次代を担う農業者の育成

～ 新規就農者の早期経営確立や女性農業者の経営参画を支援 ～

1 課題化の背景・活動内容

管内における新規就農者数は、平成 23 年度以降毎年 30 人を超えており、県内でも多い地域となっている。(図 1)

しかし、24 年度から始まった青年就農給付金制度の実施もあり、技術習得が不十分な就農者も増えている。また、新たに経営に参画し営農経験が少ない女性農業者も増えている。

そこで、就農 4 年未満の新規就農者と女性農業者を対象に、地域農業の現状や基本的な農業技術及び経営管理の基礎を習得する講座を開催した。

その結果、農業の基礎的知識や技術が習得され、新規就農者の早期の経営確立や女性農業者の経営参画に結びついた。

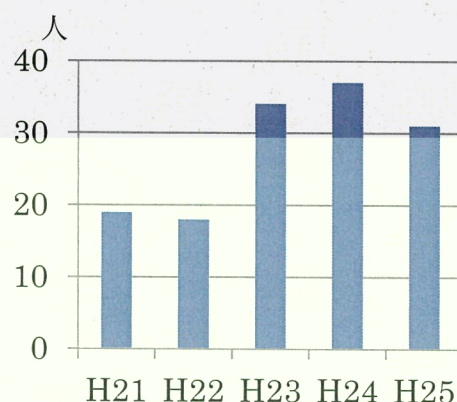


図 1 管内の新規就農者の推移

2 主な成果

(1) 基礎技術を習得し生産向上を図る

18 名 (昨年度 16 名) の新規就農者が営農基礎力強化講座を受講した。先輩農業者の講話、現地見学、普及指導員から農業の基礎知識の講義や基礎技術に関する実技、(株)オーレックでの農業機械の操作実技など計 6 回を開催し、農業の基礎知識や技術を習得した。(写真 1)



写真 1 農業機械の研修

(2) 簿記演習などを通して経営感覚を磨く

普及指導員による 6 回の経営管理基礎講座を開催し 15 名 (昨年度 5 名) の受講者のうち女性農業者の参加が半数を占めた。普及センターのパソコン室を活用して、複式簿記の基礎、パソコン簿記の実務演習、経営分析演習により農業簿記の基礎知識を習得できた。(写真 2)

このような活動を通じて、新たな担い手の人材発掘と普及センターなど支援関係機関との結びつきや情報発信ができた。



写真 2 パソコン簿記演習

県育成品種「元気つくし」の普及拡大

～ 「元気つくし」の作付拡大と収量・品質の向上を目指して ～

1 課題化の背景・活動内容

管内の水稲作付面積の約5割を占める「ヒノヒカリ」は、登熟期の高温や日照不足が原因で充実不足や白未熟粒が発生し、1等米比率が低くなる問題があった。

そこで、品質向上を目的として「元気つくし」の普及拡大を課題化した。普及推進に当たって、「元気つくし」は、収量を確保するための栽培技術が確立されていなかった。このため、実証ほを設置して当地域に適した栽培技術の確立に取り組んだ。

栽培講習会や地域座談会で水稲作付農家に「元気つくし」の価格上のメリットを示すとともに、安定収量確保のための栽培技術の定着を行った。その結果、生産者の栽培



(2) 1等米比率の高水準維持

「ヒノヒカリ」の過去3年間(平成24年～26年)の1等米比率が50%前後であるのに対し、「元気つくし」の1等米比率は80%以上と安定しており、生産者の所得向上及び産地評価の向上につながった。

(3) 穂数向上を目標とした実証試験

低地力地域である管内の「元気つくし」は、穂数過少やいもち病被害で、収量が低収となるため、各地域で肥料、栽植密度、珪酸質資材試験の実証ほを設置し、当地域に適した栽培技術を確立した。その結果、管内平均収量で400kg/10a前後が確保できるようになった。

表1 「元気つくし」の分けつ数・穂数向上を目的とした実証ほ結果

区	最高分けつ数 本/m ²	穂数 本/m ²	精玄米重 kg/10a	m ² 当たり粒数
試験区(リニア型基肥一発肥料)	333	324	474	29,975
対照区(シグモイド型基肥一発肥料)	303	291	447	28,191

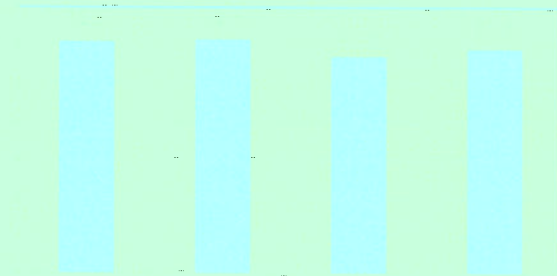
県育成品種「ちくしW2号（ラー麦）」の普及拡大

～作付面積拡大とタンパク質含有率向上をめざして～

1 課題化の背景・活動内容

ラーメン用小麦として県が育成した「ラー麦」の普及拡大においては、子実中のタンパク質含有率 12%以上を確保する栽培技術の確立が課題となっていた。

そこで、JA糸島や麦作部会と連携し、タンパク質含有率向上のための協同技術研



施設キュウリ栽培における 天敵「スワルスキーカブリダニ」の普及拡大

～ I P M（総合防除）技術の確立支援 ～

1 課題化の背景・活動内容

JA 糸島胡瓜部会（22 戸、抑制作型 7.6ha）においては、アザミウマやコナジラミなどの害虫防除が大きな課題となっていた。当時の薬剤防除主体では、薬剤抵抗性が発達しやすく、既存の薬剤が効きにくい状況となっていた。

そこで、キュウリへの定着性が優れている天敵「スワルスキーカブリダニ」を利用した防除体系を組み立て普及拡大を図った。

関係機関と連携して I P M（総合防除）プログラムを作成し、講習会や現地検討会などにおいて周知を図った。併せて、導入専門家に対しては定期的に天敵の定着状況を知らせるとともに、天敵にやさしい薬剤の使用などの指導を行った。

その結果、天敵導入面積が拡大し殺虫剤散布回数が大幅に減少した。

2 主な成果

(1) スワルスキーカブリダニ導入面積の拡大

抑制作型において平成 24 年からスワルスキーカブリダニの普及に取り組んだ結果、平成 26 年には導入面積が総面積に対して 77% にまで拡大した。

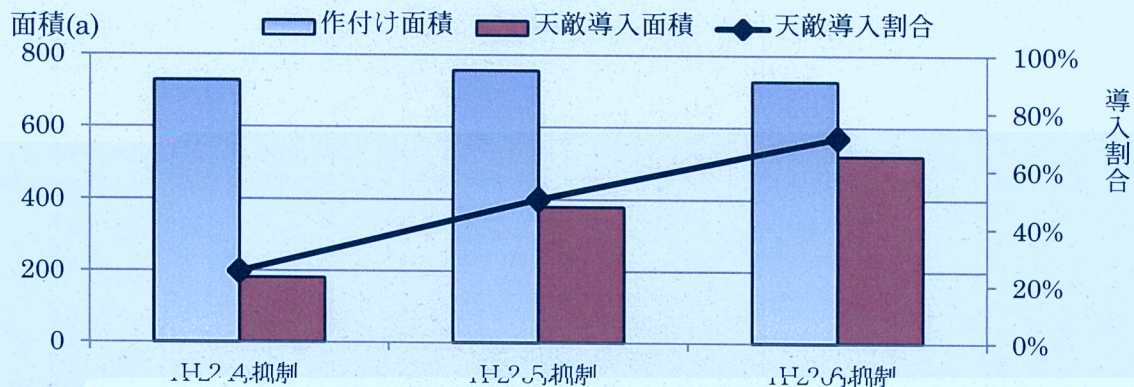


図1 天敵「スワルスキーカブリダニ」導入面積の推移（抑制作型）

(2) 殺虫剤散布回数の減少

スワルスキーカブリダニの導入により、殺虫剤散布回数が最大で 61% 減少した。

表1 スワルスキーカブリダニの導入による薬剤防除回数の減少（H24 抑制作型）

農家	天敵防除区 (H24 殺虫剤散布回数)	慣行防除区 (H23 殺虫剤散布回数)	天敵区、慣行区比較 回数（減少割合）

温度と外気と同じ550ppmに維持する技術確立を図った。(写真1)。

その結果、平成26年度の導入率はJA福岡市で80%、JA糸島で100%まで拡大した。平成27年度にはJA福岡市も100%となる予定である。

(2) 優良品種「みそら」への更新

現地実証ほを設置し、厳寒期の草勢の維持が容易で、大玉率および秀品率が高い「みそら」への更新を推進した(写真2)。

その結果、平成26年度の品種更新率はJA福岡市で100%、JA糸島で60%にまで拡大した。今後も推進を



写真1 炭酸ガス施用機(手前)

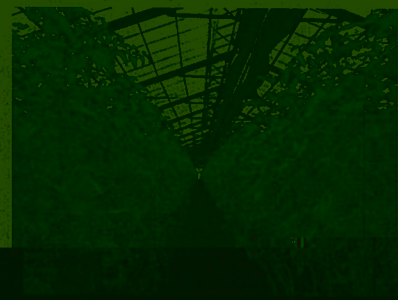


写真2 優良品種「みそら」への更新

「糸島産クルクマ」のブランド確立！

～ クルクマの産地育成と品質向上を支援 ～

1. 課題化の背景・活動内容

「クルクマ」はショウガ科の球根植物で、蓮の花に似た草姿から、主に仏花として利用されていた。糸島では、20年以上前から「クルクマ」の栽培が行われ、現在、JA 糸島クルクマ部会（13 名 2.6ha）が共選出荷を行っている。毎年多くの品種が導入されているが、品種選定や品質向上が課題となっていた。



(1) 収益性の高い品種選定支援

坪本数と単価から品種の収益を視覚的に提示するマトリクス分析の手法を用いて、毎年、品種の収益性分析を行った。

(2) 日持ち向上に向けた取り組み

夏季の日持ち向上のため、前処理剤や収穫時間が日持ちに及ぼす影響を継続的に調査した。

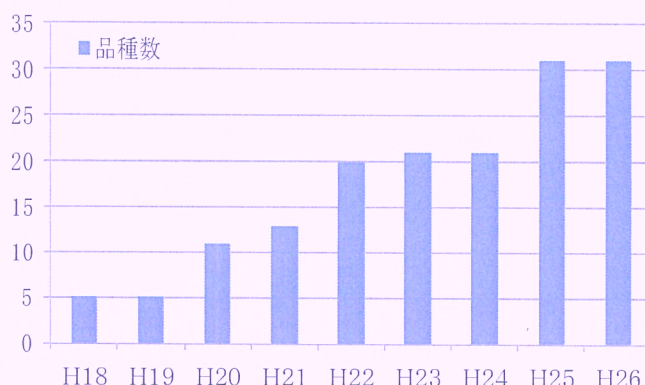


図1 クルクマ部会の栽培品種数の推移

2 主な成果

(1) 需要期拡大、販路拡大

品種の収益性分析により品種のバリエーションを揃えたことが（図1）、仏花のイメージを払拭し重要拡大につながった。また、電照栽培の導入により出荷期間が拡大し、販路が拡大した。

(2) 市場評価の向上

品種の多様化と併せて、日持ち性が向上したことにより産地の市場評価が向上した。

(3) 部会売上高が増加

部会全体の売上高は、平成21年度と比較して163%となり（図2）、坪当たり売上高も123%にまで増加した。

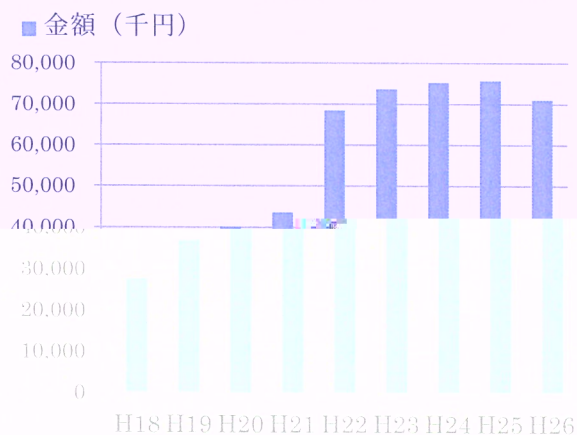


図2 クルクマ部会の売上高の推移

高品質化でホオズキの1戸当たり売上を更新

～ 昨年の1戸当たり売上を更新し過去最高額に ～

1 課題化の背景・活動内容

J A福岡市ほおずき部会では、病害虫、日照不足による実とび、実の着色不良などの品質低下が問題となっていた。

そこで、品質向上に向けて、以下の取り組みを進めた。

・ 土壌改良

全てのホオズキ作付予定地を土壌診断し、適正な石灰と肥料の投入量を部会員に示すことで、白絹病の発生を抑制し、健全な生育を促した。

・ 防除の徹底

系統別にまとめた登録農薬の一覧表を作成・配布し、適正な防除とローテーション散布を呼びかけた。また、農薬の登録状況や効果判定を聞き取り、一覧表を毎年更新した。

また、スリップスやヤガ類の発生情報をFAXで随時提供し、適期防除を促した。

・ 実とび対策、着色改善

農薬を活用して適正な面積当たり立茎本数に誘導し、光合成を促した。また、実の着色促進のため、ユズレバの使用法について講習し高品質化を図った(写真1)。

2 主な成果

(1) 生産者は減少したが作付面積は拡大

平成24年に12名であった部会員は26年までに11名に減少したが、面積は188aから203aへと拡大した。

(2) 1戸当たり売上が増大

部会の1戸当たり販売額は、過去最高だった前年をさらに上回った(図1)。



写真1 着色が改善されたホオズキ

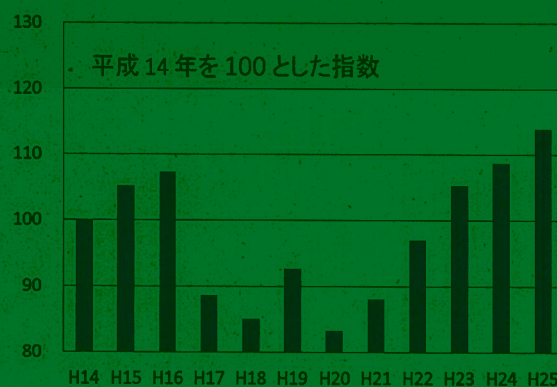


図1 ホオズキの戸あたり売上の推移

カンキツ経営の収益性向上

～優良品種への更新と高畝マルチ栽培の拡大～

1 課題化の背景・活動内容

糸島地域のカンキツ産地は、高齢化の進展や単価の低迷などにより、所得の減少や産地規模の縮小が続いている。

そこで、カンキツ経営の収益性向上のために、現地に新品種比較展示ほを設け、個別相談による園地に応じた優良品種への改植や新品種の導入を進めた。

また、高品質安定生産・拡大のための高畝マルチ栽培では、現地互評会や定期果実分析診断結果を基に個別指導を行うとともに、新規栽培者の掘り起しに取り組んだ。

その結果、高品質高単価の優良品種への更新が進み、高畝マルチ栽培も高単価を維持することで規模拡大が図られた。

2 主な成果

(1) 優良品種への更新による経営改善

3年間で、既存品種の「上野」、「伊予柑」等から高品質・高単価の優良品種「北原早生」、「もどか」等へ改植を推進した(図1)。

その結果、27戸の農家が4.4haの改植に取り組んだ。

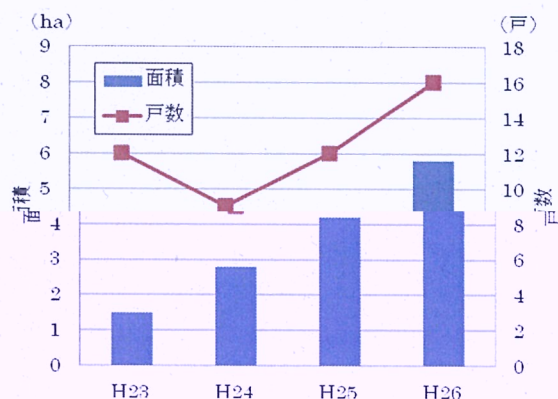


図1 改植面積、戸数の推移

(2) 高畝マルチ栽培の安定生産・拡大

園地ごとにきめ細かな技術指導を行った結果、生産安定や管理技術の向上が図られ、“紅まる君(山下紅の糸島ブランド名)”は、温州ミカンの県平均単価よりキロ当たり100円以上の高値で取引されている(図2)。

また、面積は増加傾向にあり、生産者は26年度に新たに2戸が導入し17戸となった(図3)。

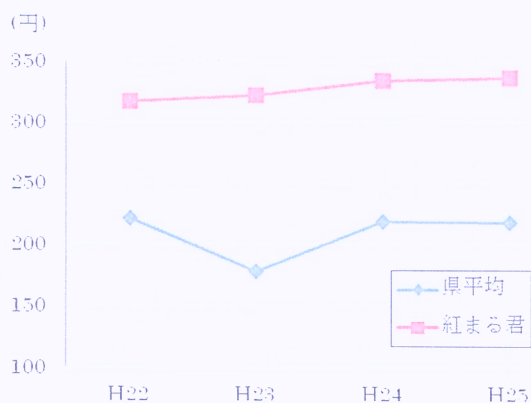


図2 “紅まる君”と温州ミカン県平均単価

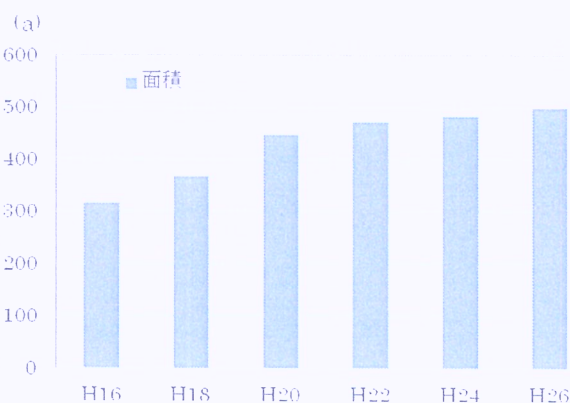


図3 高畝マルチ面積の推移

高糖分極短穂型飼料稲「たちすずか」の普及

～ 「たちすずか」の作付面積拡大と利用酪農家の増加をめざして ～

1 課題化の背景・活動内容

水田の有効活用と飼料自給率向上が求められる中、管内では飼料稲による耕畜連携への取り組みが拡大し、作付面積は増加傾向にある。しかし、既存品種は牛にとって消化の悪い粉が多く、酪農家の間では利用上の問題点となっていた。2011年に育成されたWCS用水稲新品種「たちすずか」は、既存品種に比べ消化のよい茎葉割合が高く、発酵に必要な糖含量が高いだけでなく、倒れにくく栽培しやすいという優れた特長を有している。今後、高品質WCS生産や乳量向上に大きく寄与することが期待される。

そこで、栽培実証ほの設置、講習会の開催やWCS給与実証調査等の取り組みを通じて「たちすずか」の早期の普及・定着を目指した。

2 主な成果

(1) 「たちすずか」の作付面積拡大と利用酪農家の増加

「たちすずか」の現地栽培実証ほを設置するとともに、講習会等において既存品種とは異なる肥培管理等を中心に栽培上の留意点を説明し、積極的に新品種導入を誘導した。その結果、平成26年の「たちすずか」作付面積は、前年に比べ30%増加し109haに拡大した。また、飼料稲作付面積に占める「たちすずか」の作付割合は50%に高まった(図1)。

酪農家へは、個別巡回指導により、「たちすずか」WCS給与上のメリットについて先進事例等を交えて情報提供を行い、「たちすずか」の利用を促した。「たちすずか」を利用する酪農家戸数は平成26年には4戸増加して9戸となり、飼料稲を利用する酪農家の約半数が「たちすずか」の利用者となった。また、これまで飼料稲の作付け自体が無かった市町村・地区へも「たちすずか」の栽培・利用が広がった。

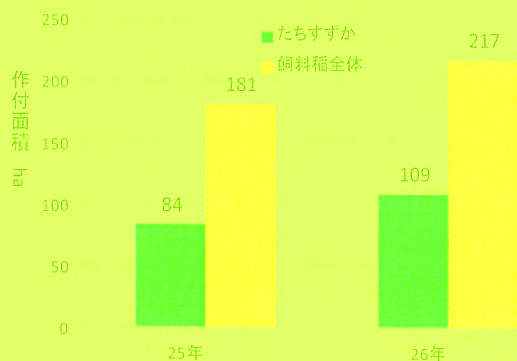


図1 作付面積の推移

表1 「たちすずか」WCS給与時の乳量、乳成分

	平均乳量 (kg/日)	乳脂率 (%)	蛋白質 率(%)	無脂固形 分率(%)
たちすずか(乳熟期)	24.9	4.23	3.25	8.82
たちすずか(黄熟期)	25.9	4.17	3.33	8.85
イタリアン	26.1	4.03	3.21	8.65

(2) 乳牛への「たちすずか」WCS給与実証

営農現場では、従来の飼料稲栽培を踏襲し乳熟期から糊熟期の若刈りの傾向があり、「たちすずか」が持つ良質サイレージ生産のメリットを活かしていない状況が見受けられた。このため、熟期の異なるWCSの乳牛への給与実証調査を行った。その結果、黄熟期に収穫した「たちすずか」は、イタリアンライグラス給与時と同等の乳量増加効果が期待できることを確認した(表1)。

トピックス・各種表彰

糸島稲作経営研究会 30 周年記念式典

～ 模範となる経営者、地域のリーダーを目指して更なる活躍を誓い合う ～

平成 26 年 4 月 11 日、糸島市において糸島稲作経営研究会の 30 周年記念式典が行われ、会員や来賓を含めて約 120 名が出席しました。

糸島稲作経営研究会（会長：高田和浩氏）は現在会員 48 名、糸島地域の耕作面積の約 4 分の 1 を担っており、水稲、麦、大豆の栽培技術の向上や経営発展を目指した研究会活動に取り組むとともに、模範となる経営者として、更には地域のリーダーを目指して頑張っています。

式典では、設立当初からこれまでの足跡をまとめた「糸島稲作経営研鑽の軌跡 ～福岡糸島稲作経営研究会三十年史～」創刊が紹介されました。出席者は皆、その当時の先輩諸氏の活躍や苦労について、思い出深く振り返りながら、今後も更なる研究会の活躍を誓い合い、



「農事組合法人 かじわら」が設立 ～ 地域の農地の維持を目指して那珂川町で最初の法人誕生 ～

平成 21 年に設立された梶原営農組合を母体にした「農事組合法人 かじわら」が、平成 26 年 7 月 1 日に法人化されました。

那珂川町では初めての集落営農法人組織で、JA 筑紫管内では 4 番目の組織となりました。当法人の組合員は 9 名で、今後は水稲・野菜・



「農事組合法人 福吉」が設立 ～ 糸島市二丈吉井(吉井上地区)に念願の水田農業の受け皿組織が誕生 ～

平成 27 年 2 月 13 日、糸島市二丈吉井に「農事組合法人 福吉」が設立されました。この地区では、長年、中山間地域直接支払制度や農地・水環境保全向上対策事業等を活用し、農地を守る活動を行ってきました。また機械利用組合を立ち上げ効率的な水田農業を行なうことにより、地域農業の維持発展と農家所得の向上に寄与してきました。

平成 24 年から法人化に関する研修会や会議を重ね、平成 27 年 1 月 29 日に設立総会が開催され、組合員の決意を新たに事業をスタートさせました。

今後は、地域の水田農業の受け皿組織としてさらなる発展が期待されています。



糸島地区根こぶ病防除対策研修会を開催

糸島地区根こぶ病防除対策協議会は、平成26年10月21日にJA糸島本店において研修会を開催し、JA部会員、直売所出荷者などおよそ50人が参加しました。

研修会では、独立行政法人農業・食料産業技術総合研究所の村上弘治先生から土壌の健康診断に基づく根こぶ病の診断と対策について講義がもられました。また、今回初めて糸島農業高校が参加し、当校“根っこ部”から土壌pH測定と検定植物を用いた「糸農式 根こぶ病発病診断」の活動報告があり、出席者の関心を集めました。当協議会では、今後も地域一丸となって根こぶ病の対策に取り組んでいくこととしています。



糸島地区根こぶ病防除対策協議会主催の研修会

JA 筑紫スイートコーン研究会が設立 ～ スイートコーンの生産・販売拡大に向けて ～

筑紫地区党農推進協議会（構成員・筑紫地区4市1町） JA 筑紫 農業指導



農業経営者セミナーで雇用管理を学ぶ

～ 人材育成のポイントや経営者の役割、経営ビジョンの重要性について ～

平成 26 年 7 月 25 日、8 月 7 日の 2 日間にわたり、農業経営の改善・発展を目指す農業者や雇用型経営の農業者等を対象に、農業経営者セミナーを開催しました。セミナーでは、ビッグ・フィールド・マネージメント株式会社取締役を講師に、人材育成のポイントや経営者の役割、経営ビジョンの重要性について講義をしていただきました。

「従業員とのコミュニケーションの大切さを再確認した」、「相手の話を聴くことの重要性がわかり、経営に対する考え方が参考になった」等の感想が聞かれ、セミナー後も個別の相談が相次ぎ、大変有意義なものとなりました。



コミュニケーションを見える化して
農業者に説明する講師



熱心にセミナーを受講する農業者

表彰名：平成 26 年度大日本農会農事功績表彰「緑白綬有功章」

- 受賞者名：鳥巢 孝一 氏（糸島市）
- 経営内容：水稲 11.7ha、麦 20.5ha、大豆 2.6ha
- 活動の概要：

鳥巢氏は借地を中心とした米・麦・大豆の安定した大規模経営を確立されています。

また、地域農業のリーダーとして、県育成水稲品種「夢つくし」などの新品種導入や J A 糸島特裁米部会の設立に尽力され、特別栽培米等を推進し稲作経営を牽引されました。

更に、糸島地域の稲作経営研究会や J A 糸島普通作協議会、福岡県稲作経営者協議会の会長、全国稲作経営者協議会副会長などを歴任され、稲作経営の先導的な役割を担うとともに、研修生の受け入れなど担い手育成にも貢献されています。今回の表彰は、こうしたこれまでの取り組みが高く評価されたものです。



表彰名：福岡県農業指導功労者表彰

- 受賞者名：岩城 賞弘 氏（糸島市）
- 経営内容：養豚（母豚 35 頭）、アスパラガス 10a
- 活動の概要：

岩城氏は、平成 18 年度から福岡県新規就業セミナー・就業相談会の相談員として、新規就農希望者に対し適切なアドバイスを行い県内の新規就農者の育成に貢献されています。

また、新規参入で農業を始めた自身の経験を活かし、糸島地域新規参入農業者支援協議会の委員として関係機関と連携した支援活動を行うとともに、自ら設立した「新規就農者ネットワーク糸島」の代表として、新規参入者に対する研修・交流活動を展開するなど、新規就農者の経営定着へ向けて尽力されています。岩城氏のこうした取り組みが高く評価され今回の表彰となりました。



表彰名：農林水産省 生産局長賞

（福岡県産きく品評会「栽培・育種の部」賞状受賞）

- 受賞者名：三苦 安夫 氏（糸島市）
- 経営内容：輪ギク等 75a
- 活動の概要：

三苦氏は輪ギクとオリジナル糸菊の栽培を行っており、肥培管理や水管理、病虫害防除の徹底など、きめ細やかな栽培管理により、高品質なキクを出荷されています。

キクを作って 30 年。近年、夏季の天候が不安定で、露地ギクの生産が難しくなっている中、長年の経験を活かしながらも、新品種や新技術を積極的に取り組まれています。

今回の受賞は、受賞品種「精吟」を、病虫害の発生が無く、ボリュームや草丈の揃いを良好に仕上げたことが高く評価されたものです。



表彰名：九州農政局長賞
(福岡県花き品評会：産物の部)

- 受賞者名：吉村 和実 氏 (糸島市)
- 経営内容：草花類 (アネモネ等) 67a
- 活動の概要：

吉村氏は、「今まで通り」ととらわれず、新たな栽培技術の導入や管理技術の向上に力を入れ、アネモネの他にも、クルクマやミヤコワスレといった糸島特産の花きを栽培されています。

各品目の部会長を歴任され、地域農業のリーダーであるとともに、若手農業者の良き相談相手にもなられています。

今回の受賞は、受賞品種「モナリザワインシェードインプ」を、大輪でボリュームのある花に仕上げたことが高く評価されたものです。



表彰名：福岡県知事賞

(福岡県花き品評会：技術・ほ場の部 トルコギキョウ)

- 受賞者名：大島 猛彦 氏 (糸島市)
- 経営内容：トルコギキョウ 32a
- 活動の概要：

「自分で作ったものを自分で売りたい」という強い思いで、営業マンから新規参入して5年目。大島氏は、栽培技術の向上に日々努力を重ねられ、その魂をこめて栽培したトルコギキョウは、県内外の市場から高い評価を得ています。また、就農5年目にして、品評会最高賞を受賞したことは、県内の若手トルコギキョウ農家へ強い刺激となり、よい波及効果を生んでいます。

今回の受賞は、新品種「ハピネスホワイト」を大輪でボリュームある花に仕上げるなど、品種の特性を活かした栽培を確立したことが高く評価されたものです。



3 資料一覧

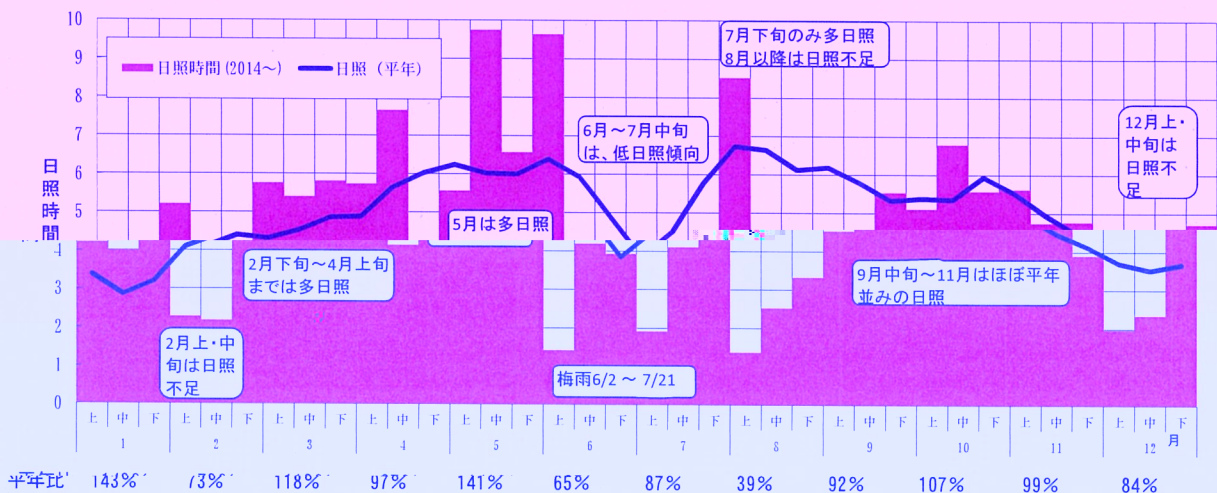
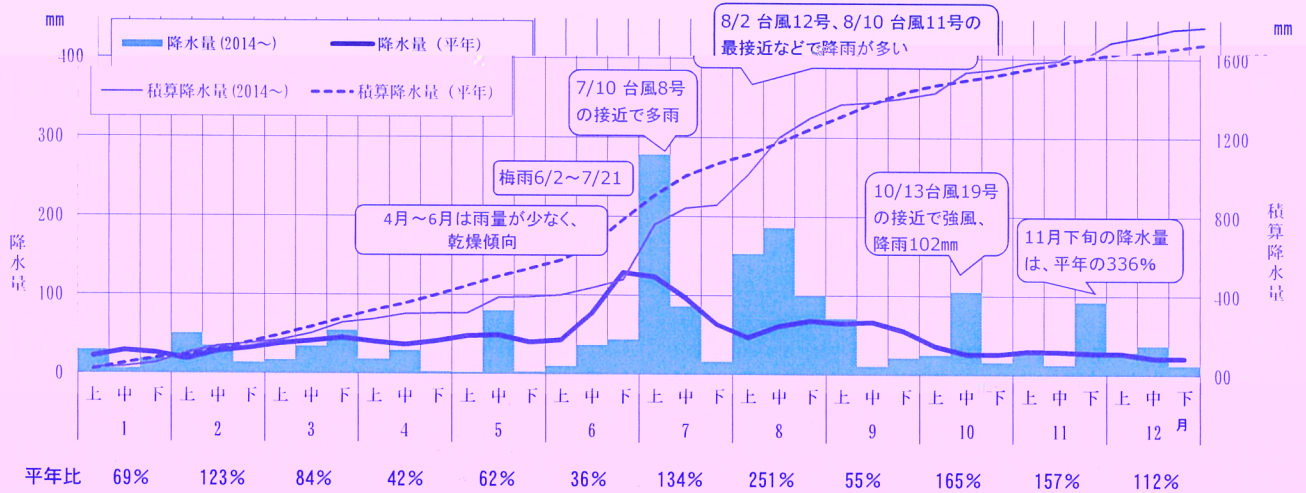
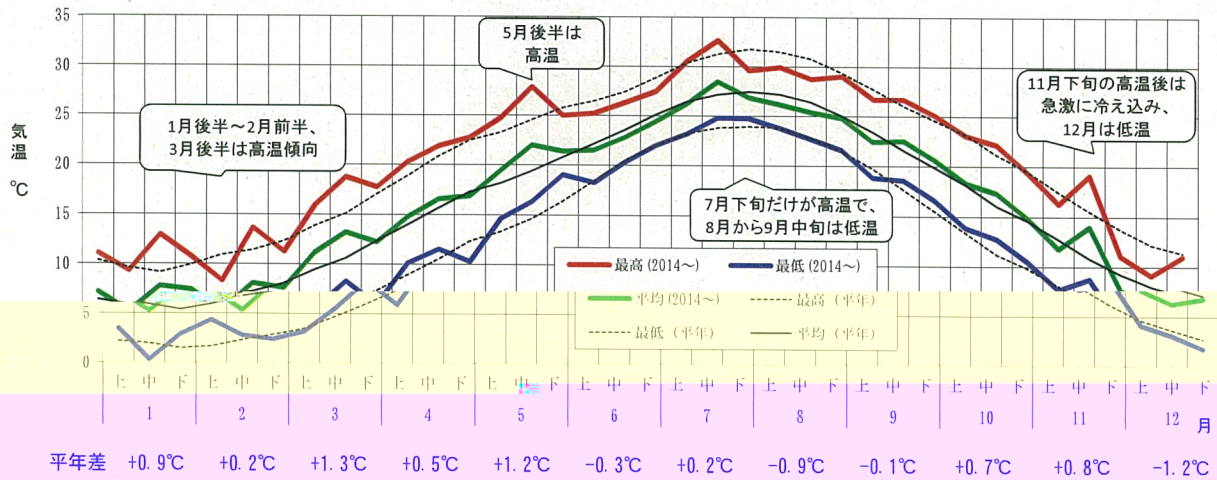
(1) 現地活動情報一覧

情報No	タイトル	執筆課係名	発信日
No. 1	高品質・高収量な「イチバンボシ」を目指して！	水田農業	26. 4. 9
No. 2	糸島稲作経営研究会、発足30年を迎える！	水田農業	26. 4. 18
No. 3	若い力で柑橘産地を活性化！	果樹	26. 5. 1
No. 4	新鮮で甘い！朝どりスイートコーン大好評	地域	26. 6. 11
No. 5	筑紫地区の新たな担い手育成に向けて	果樹畜産	26. 7. 7
No. 6	「ブランド」とは時間をかけて培った信頼	地域	26. 7. 9
No. 7	農業組合法人「かじわら」が設立	水田農業	26. 7. 14
No. 8	会員の活動事例に学ぶ	地域	26. 8. 20
No. 9	強い農業経営をつくるマネジメント術	地域	26. 8. 20
No. 10	生産者と仲卸業者と小売業者が意見交換	野菜	26. 8. 28
No. 11	糸島産「クルクマ」を全力PR	花き	26. 9. 16
No. 12	実需者に選ばれる「糸島の麦」づくりを！	水田農業	26. 10. 21
No. 13	野菜経営のポイントと農業機械の安全操作を学ぶ	地域	26. 11. 14
No. 14	経営のビジョンや夢、悩みを語り合う	地域	26. 11. 27
No. 15	技術競技やスポーツ交流に汗を流す	野菜	26. 12. 1
No. 16	聴きたくなる話し方、話したくなる聴き方を目指して！	地域	26. 12. 11
No. 17	地域を担う農業青年が熱い想いを語る！	水田農業	27. 1. 6
No. 18	金武観光ぶどう部会で基礎学習会を開催！	果樹	27. 1. 27
No. 19	福岡県トップの高品質麦を目指して！	水田農業	27. 1. 30
No. 20	スイートコーンの生産・販路拡大に向けて	地域	27. 2. 6
No. 21	高収量・高品質な麦生産者の管理技術に学ぶ	水田農業	27. 3. 2

※「活動情報」の内容は、下記の福岡県ホームページの出先機関(福岡普及指導センター)に掲載しています。

<http://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/fukuoka-fukyuusidoucenta.html>

(2) 平成26年の気象概況 (気温・降水量・日照時間：旬ごと)



前原アメダスデータを基に作成

- 平成26年(1～12月)は、4月～6月の少雨、梅雨時期の日照不足、特に8月の低温・多雨・日照不足、9月の乾燥傾向と集中的な降雨、12月の急激な冷え込みと日照不足がみられました。
- 台風の上陸はありませんでしたが、8号、12号、11号、19号などの接近が強風や集中豪雨などをもたらしました。

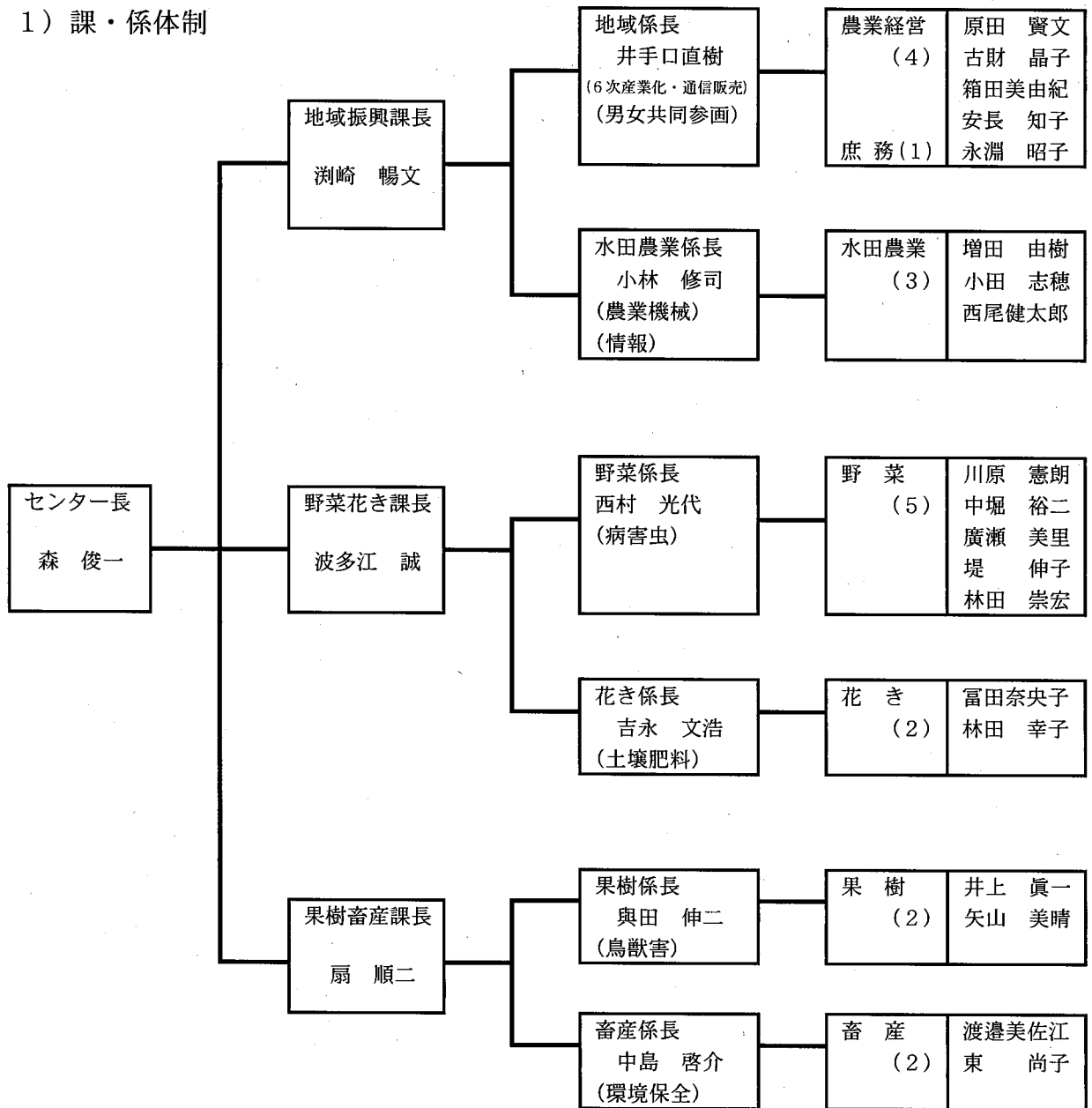
(3) 平成26年度 主な展示ほの概要

係名	対象物	課題名	設置場所	要約
水田農業	水稲	ケイ酸質資材施用効果の検証	福岡市	育苗培土と穂肥時にケイ酸質資材を施用し、無施用区との比較試験を実施した。施用区は無施用区と比較して、収量が多い傾向となった。
水田農業	水稲	県奨励品種決定のための現地試験調査	糸島市	「ヒノヒカリ」から「にこまる」クラスの熟期になる県育成品種の現地試験を実施した。「ちくし90号」の収量及び品質が良く、準奨励品種になった。
水田農業	水稲	種子品質向上対策のための施肥量の実証	糸島市	基肥と穂肥の施肥量の試験した。基肥は減肥しても精籾重歩合や品質は下がらないので、減肥が可能である。穂肥は1回目を減肥すると精籾重歩合が下がるため、基準とおりの穂肥量が必要である。
水田農業	水稲	飼料用米用の新しい肥料資材の効果	福岡市 那珂川町	既存の基肥一発肥料の銘柄を対照に、新しい肥料の比較試験を実施した。新しい肥料のLP複合2566は、収量が同等で肥料単価が安いために実用的である。
水田農業	麦	「イチバンボシ」の品種特性把握試験	福岡市	新しい除草剤の試験を実施した。薬害が少し発生したが、収量には影響なく、除草効果は高かった。
水田農業	麦	「ちくしW2号」のタンパク含有率向上のための新しい追肥肥料資材の検証	糸島市	追肥用の新しい緩効性肥料で、慣行栽培との比較試験を実施した。タンパク含有率は同等であったが、収量が低くなった。
水田農業	大豆	収量確保のための追肥試験	筑紫野市	収量向上に対する開花期頃の追肥効果を試験した。追肥をしても収量は変わらなかったが、大粒比率は増加した。
水田農業	大豆	収量確保のための基肥施用試験	糸島市	収量向上に対する基肥効果を試験した。基肥に窒素2kgを施用しても収量は変わらなかったが、大粒比率は増加した。
野菜	イチゴ	福岡県育成イチゴ品種「あまおう」の密植栽培による厳寒期の収量向上	福岡市	試験区は小型紙ポットで育苗した苗を株間15cmでマルチ後定植、対照区は株間23cmで夜冷4型の定植後マルチで試験。定植日は両区とも9月20日である。10a当たり、12月の収量は対照区が427kg多く、1月の収量は試験区が396kg多くなった。試験区の1番果房の収穫終了するまで調査を継続中である。
野菜	アスパラガス	畝表面のかき落としの程度差による収量への影響	筑紫野市	春芽収穫前のかき落としを強くした場合の収穫量を調査した。10a当たり、春芽では試験区486kg、対照区442kg、夏秋芽では試験区1,903kg、対照区1,892kgとなり試験区の収穫量が55kg多かった。H27の春芽への影響も考えられるため、継続して調査中である。
野菜	アスパラガス	アスパラガス栽培における光反射資材を利用したアザミウマ類防除の検討	糸島市	ハウスサイドの外側地面に光反射資材(タイバックシート)を被覆しアザミウマ類のハウス内への飛び込み防止効果を調査した。試験区のアザミウマ捕殺頭数は対照区の14.7%であり被覆による飛び込み防止効果が認められた。
野菜	イチゴ	イチゴにおける肥効調節型肥料の施用による施肥改善	福岡市	肥効調節型肥料「無双」を基肥・追肥で使用し、生育状況、収量、果実品質(達観)を調査した。その結果、12月までの生育と果実品質は慣行区と差がなかったが、1月20日までの収量は試験区1,088kg/10a、対照区1,035kg/10aと試験区がやや多い結果となった。また、窒素成分を含む液肥の施用回数が対照区で3回、試験区では1回と省力的であった。

係名	対 象 物	課 題 名	設 置 所	要 約
野菜	イチゴ	イチゴ果実のコルク化に関する防止対策	福岡市	前年コルク果の発生が多かった高設栽培農家で、ホウ素を含む肥料の培地施用及び、葉面散布区を設け、2番果房のコルク果の発生程度を調査した。その結果、試験・対照区ともにコルク果の発生がなかった。そのため、コルク果の発生要因はホウ素欠乏の可能性は低く、他の要因によるものであることが示唆された。

(1) 並及地道センターの活動体制

1) 課・係体制



() 内は窓口担当

2) 班体制

ア 地域班

- ・糸島班 (糸島市)
- ・筑紫班 (筑紫野市・大野城市・太宰府市・春日市・那珂川町)
- ・福岡班 (福岡市)

イ センター内運営事項における推進班

- ・青年農業者育成班
- ・情報推進班
- ・安全安心推進班
- ・経営体育成推進班
- ・女性農業者支援班

福岡県行政資料	
分類番号 PA	所属コード 4703119
登録年度 26	登録番号 0001

